

『源氏物語』現代語訳の試み

—「御法」巻を対象として—

A modern Japanese translation of the “Minori” chapter of *The Tale of Genji*

佐藤 由佳

SATOH Yuka

キーワード：源氏物語・現代語訳・御法巻・十一歳から十二歳

一、本稿の趣旨

私は、修士論文（平成三十年一月二十五日提出）の前半部分において、与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、瀬戸内寂聴、林望そして中野幸一の現代語訳を比較・調査することによって、それぞれの特質と評価を明らかにした。その結果、すべての読者にとって問題点の残らない現代語訳をすることは不可能であるという認識に至った。そして、その解決策の一案として、読者を年齢別に区分し、それぞれの年齢層にふさわしい現代語訳を試みることにしたのである。

本稿では、十一歳から十二歳という少年少女を読者対象として、『源氏物語』「御法」巻の現代語訳を試みることにする（修士論文の後半部分）。

『源氏物語』が広く一般の人々に読み継がれることとなったのは、与謝野晶子の口語による現代語訳が出版されてからであり、それに続く、さまざまな現代語訳によって、その読者層は拡大していった。わかりやすい現代語訳こそが、『源氏物語』ひいては古典の普及に貢献してきたのである。

そこで、特にこれからの若い世代に『源氏物語』を読む機会を提供することは、決して無意味なことではあるまい。読者対象は、古典について義務教育で学びはじめる小学校第五、第六学年、すなわち十一歳から十二歳の少年少女とした。平成二十九年三月三十一日に告示され、平成三十二年四月一日施行予定の小学校学習指導要領（注一）「国語」【第五学年及び第六学年】は、「1. 目標」に続き「2. 内容」を掲げているが、その第（3）項目は、次のとおりである。

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。

イ 古典について解説した文章を読んだり作品の内容の大体を知ったりすることを通して、昔の人のものの見方や感じ方を
知ること。

ウ 語句の由来などに関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言の違いを理解すること。また、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。

このことから当該年齢層は、古典について学びはじめるにふさわしい時機とされるのである。

また、与謝野晶子は十二歳(注二)で、円地文子は小学校高学年(注三)で、瀬戸内寂聴は十三歳(注四)で、『源氏物語』の読者となったことが分かっている。さらに、時代はさかのぼるが、『更級日記』の作者である菅原孝標女も『源氏物語』に興味を持ち、それらを読みたいと強い願望を抱いた年齢が十三歳(注五)であった。

十一、二歳(数え年では十二、三歳)は、自らも古典に興味を持ち始める年齢層と言えるであろう。私も小学五年生の時、塩田良平(古典文学全集・4)『源氏物語』(昭和四十年六月三十日 ポプラ社)を

手に取ったことを記憶している。

当該年齢層向けの古典の既刊本としては、瀬戸内寂聴(少年少女古典文学館 第五卷)『源氏物語』(上)(平成四年十二月十九日 講談社)及び、(少年少女古典文学館 第六卷)『源氏物語』(下)(平成五年一月二十八日 講談社)などがある。しかしながら、これらは全訳ではない。

当該年齢層向けの全訳の『源氏物語』が必要である。そのような理由から、自身での現代語訳を試みることにしたのである。その取りかかりとして、『源氏物語』「御法」巻の現代語訳を試みることにする。

修士論文前半における調査過程において、凡例もしくはそれに準ずるものの必要性を痛感した。そもそも訳者がどういう意図をもって訳しているのか、どのようなところに注目しているのか、また、訳出の基準とするものは何であるのかを読者が事前に知る必要がある。それらをあらかじめ知ることにより、読者は、訳者の意図に沿って円滑に読み進めることができるのである。その結果として、内容の理解にもつながっていくであろう。

さらに、今回『源氏物語』「御法」巻を現代語訳するにあたっては、読者の年齢層を極めて細かく限定しているため、特に凡例もしくはそれに準ずるものが必要である。また、当該年齢層は、古典の原文そのものがどのようなものであるかも理解しているとは考えにくい。さらに、『源氏物語』がどういふものなのかも知らない可能性も高い。以上のことからしても、ある程度の説明を前置きする必要がある。そし

て何よりも、この現代語訳がどのような基準で行われたかについては丁寧に記すべきであろう。

今回の〈試み〉においては、訳者の意図をも含めた内容を盛り込んだ「まえがき」という、凡例にかわるものをはじめに記すこととする。

注一…「小学校学習指導要領」(平成二十九年三月改正 文部科学省)

〈文部科学省告示第六十三号〉

注二…与謝野晶子著『新訳源氏物語』のあとがきである「新訳源氏物語の後に」において、「しかし自分は十二歳頃からもっていた原著の興味にひかれながら、・・・」と記している。

注三…円地文子著〈わたしの古典〉『円地文子の源氏物語』〈巻一〉の中の「わたしと『源氏物語』」において、「『源氏物語』を読み始めたのは小学校の高学年の頃であつたらうか。」と記している。

注四…瀬戸内寂聴著『わたしの源氏物語』の中の「出逢い」において、「昭和十年(一九三三)、わたしは十三歳で、(中略)『源氏物語』

与謝野晶子訳」という文字が、わたしの目を引きよせた。(中略)読みやすい歯切れのいい文章に案内され、わたしは一気に源氏物語の世界に引きこまれていった。」と記している。

注五…『更級日記』には、「世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどいかしきさまされど、わ

『源氏物語』現代語訳の試み (佐藤由佳)

が思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、・・・」(犬養廉校注・訳〈新編日本古典文学全集〉『更級日記』)と記されている。

【参考文献】

- ・塩田良平〈古典文学全集・4〉『源氏物語』(昭和四十年六月三十日ポプラ社)
- ・山岸徳平「古典と現代語訳」(阿部秋生ほか校注・訳〈日本古典文学全集十三〉『源氏物語』)〈月刊報(昭和四十七年一月二十五日小学館)〉
- ・円地文子〈わたしの古典6〉『円地文子の源氏物語』〈巻一〉(昭和六十年十月二十三日 集英社)
- ・永井和子「源氏物語の現代語訳」(今井卓爾ほか編〈源氏物語講座第九卷〉『近代と海外との交流』(平成四年一月二十日 勉誠社))
- ・瀬戸内寂聴〈少年少女古典文学館 第五卷〉『源氏物語』〈上〉(平成四年十二月十九日 講談社)
- ・瀬戸内寂聴〈少年少女古典文学館 第六卷〉『源氏物語』〈下〉(平成五年一月二十八日 講談社)
- ・瀬戸内寂聴『わたしの源氏物語』(平成五年六月二十五日 集英社)

- ・藤岡忠美校注・訳『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（平成六年九月二十日 小学館）
- ・犬養廉ほか校注・訳〈新編日本古典文学全集〉『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（平成六年九月二十日 小学館）
- ・秋山虔『源氏物語』現代語訳の方法―三度目の挑戦から―（室伏信助編『いま「源氏物語」をどう読むか』（平成七年六月三十日 おうふう））
- ・秋山虔「源氏物語の現代語訳―その限界をどう考えるか―」（秋山虔編〈国文学解釈と鑑賞別冊〉『源氏物語の鑑賞と基礎知識』〈二十九 花散里〉（平成十五年六月十日 至文堂））
- ・与謝野晶子『与謝野晶子の源氏物語〈下〉 宇治の姫君たち』（平成二十年四月二十五日 角川学芸出版）
- ・室城秀之ほか『源氏物語』「蓬生」の巻現代語訳試案（一）（『言語・文学研究論集』〈第十四号〉（平成二十六年三月 白百合女子大学言語・文学研究センター））
- ・大塚ひかり「誰のための現代語訳か」（『リポート笠間』〈五十九号〉（平成二十七年十一月二十日 笠間書院））
- ・北村結花「千年の時をかける少女―児童書における『源氏物語』の現在―」（『文学・語学』〈第二百十九号〉（平成二十九年六月二十五日 全国大学国語国文学会））

・文部科学省「小学校学習指導要領」〈文部科学省告示第六十三号〉（平成二十九年三月三十一日改正）

二、『源氏物語』「御法」巻の現代語訳

まえがき

『源氏物語』は、平安時代中期の十一世紀初め頃に書かれました。作者は、この頃の天皇である一条帝の彰子皇后に仕えていた、紫式部と呼ばれる宮仕え女房であると言われています。『源氏物語』は全部で五十四巻からなる、長編物語です。ここでは、その四十番目にあたる「御法」の巻全文の現代語訳を行いました。

千年も前に書かれたこの物語の文章は、現代の私たちが使っている言葉とはずいぶん違います。原文をそのまま読んでもすぐには理解できないでしょうから、皆さんが理解できるように現代の言葉に移し換えました。

また、住居や衣服など生活環境もまったく違います。千年前の言葉を現代の言葉に移し換えただけでは、当時の生活環境が理解できるものではありません。しかし、人間の心はどうでしょうか。悲しい気持ち、うれしい気持ちなどの心の動きは今も昔も変わらないでしょう。また、問題にぶつかったときにどのようにして物事を処理していく

か、どのようにして苦しい気持ちから抜け出すのかなどの心のあり方は、昔の人たちの考え方もヒントになるはずです。そういったところに注意しながら読み進めてみてください。

この「御法」の巻は、主人公の光源氏の最愛の女性であった紫の上の死の場面を描いています。愛する家族の死は、必ずやってきます。避けては通れない、とても悲しいつらい別れなのです。死期が近づいていることがわかっている紫の上は、自分が死んでいくということの悲しさ以外にも一つ、残された光源氏を悲しませることがつらくてなりません。また、紫の上がいなくなるなど考えられない光源氏は、深い悲しみの中にいます。そうした、死んでいく人と残される人との心を描いているのがこの巻なのです。

そしてもう一つ。光源氏には、夕霧という子どもがあります。彼は、少年の頃から、継母である紫の上に恋心に似た気持ちをもっていました。おとなになった夕霧が今もお、ひそかに抱き続けている、思慕の感情が表現された場面でもあります。

登場人物の「大切な人」への思いを読み取ってもらえるように、できる限り原文を尊重して現代語訳しました。しかし、一言一句違わないように訳すと、かえって意味のわかりにくいところが増えてしまいます。そこで、わかりやすい現代語訳するために次のような基準を設けました。

一、作品本文は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳

『源氏物語』現代語訳の試み（佐藤由佳）

〈新編日本古典文学全集〉『源氏物語』〈四〉に依拠しました。その他にも、既刊の注釈書や現代語訳を参照しています。参照した書籍については、【参考文献】として一覧にしております。

一、この物語が成立した当時の読書は、音読が基本でした。その雰囲気も少しは味わえるよう、音読にふさわしい文章にしました。そのため、適宜、長い文章などを区切って、いくつかの文章に改めました。

一、特に長文については、語句の順序を変えることによって意味が通りやすい場合は、語句の順序を入れ替えました。また、内容をスムーズに理解し、読み進められると判断したところでは、文そのものの順序も入れ替えました。

一、原文においては、主語がない文章が多く、そのままでは誰が発言している言葉なのかわからなくなってしまふ可能性があるので、適宜、主語を補って誰の言動であるかわかりやすくしました。

一、この物語は、女房が語っているという形式で物語が進んでいきます。よって、語りかけるときの言葉としてふさわしいと思われる「です・ます」調にしました。

一、物語の語り手が、登場人物の心情を語っている場面があります。それらについては、その登場人物の心内語として、へくでくくりました。

一、『源氏物語』の中では、和歌が詠まれます。和歌は、登場人物の心情を五、七、五、七、七の平仮名三十一文字により表現したもの

です。その和歌を和歌としてそのまま現代語訳すると、そこでストーリーが途切れてしまいがちになります。スムーズに読み進めるために、和歌はあえて和歌として訳していません。会話文同様、その内容を登場人物が発言したという形式にし、本文に織り込みました。そこで、和歌なのか通常の会話文なのかを判別できるようにするために、和歌については『』でくくり表現しました。

一、当時の経典の名称や舞楽の名称など、説明を要するような言葉もありますが、途切れることなくスムーズに読み進めるために、解説を付け加えたりなどはしていません。ただし、本文中に何の名称であるのかという程度の説明は加えておきました。

一、この現代語訳には、まだ学習していないやや難解な語句なども含まれます。それらについても意味等の補足はつけてありません。前後の言葉からおおよその意味は理解できると思います。詳しく知りたいときは、辞典などで調べてください。

一、『源氏物語』においては、物語中で年月の経過とともに登場人物の呼称が変化していきます。この現代語訳を行うにあたり、基本的には一般に広く知られている呼び名で記しました。ただし、主人公の光源氏については、あえて原文どおりの「院」を用いました。以下、「御法」巻に登場する人物紹介とともに、この巻の原文ではどのような呼称であったかもあわせて記しておきます。

院・・・『源氏物語』の主人公である光源氏。准太上天皇。五十一

歳。この「御法」の巻においては、「院」と記されています。この「院」という呼称は、当時の天皇およびそれに準ずる人についての呼び名です。光源氏は、准太上天皇の立場にあり、住まいが六条院というところだったため、「六条院」や「院」と呼ばれていました。

紫の上・・・光源氏の妻の一人であり、最愛の女性。四十三歳。

光源氏と長年夫婦として暮らしていますが、二人の間に子どもはいません。光源氏と明石の君の間に生まれた娘（明石の中宮）を養育し、またその子どもである匂宮などの養育もしています。

夕霧の君・・・父は光源氏、母は葵の上（光源氏の最初の正妻で、夕霧の出産と同時に亡くなっています）。三十歳。この「御法」の巻においては、「大将の君」と記されています。「大将」というのは官職名です。当時、男性の場合は、官職名で呼ばれることが多く、昇進することによって呼称が変化していきます。

明石の中宮・・・父は光源氏、母は明石の君。二十三歳。天皇と結婚し皇后となりました。当時の皇后は「中宮」、天皇は「帝」「内裏」などと呼ばれていました。

匂宮・・・父は天皇、母は明石の中宮。五歳。この「御法」の巻においては、「三の宮」と記されています。「宮」は天皇の子どもであること、「三」は三番目に生まれた男の子という意味を持っています。

明石の君……光源氏の妻の一人。明石の中宮の実母。四十二歳。

花散里……光源氏の妻の一人。夕霧の育ての母。

頭の中將……光源氏の古くからの親友。葵の上の兄。五十六、

七歳か。この「御法」の巻においては、「致仕の大臣」と記されています。「致仕」は官職についていたけれども、それを辞めた人を指します。この人物は、「太政大臣」を務めていました。

秋好の中宮……一世代前の皇后。四十二歳。光源氏と紫の上

が親代わりを務めています。この「御法」の巻においては、「冷泉院の後の宮」と記されています。

以上が、現代語訳にあたっての基準です。

この現代語訳は、スムーズかつリズムカルに読みすすめられるように心がけて現代語訳しました。つまり、音読した場合のことを念頭に置いています。よって、読み聞かせにもふさわしいものと考えます。対象年齢を十一歳から十二歳と設定していますが、読み聞かせであれば、対象年齢よりいくぶん低年齢層にも適していると考えます。

御法（現代語訳）

出家を願う重病の紫の上

紫の上は、四年前に大病をされてからというもの、たいそう弱ってしまわれました。はつきりと、どこが悪いということでもありませんが、何かしら気分がすぐれない日々が続いていらっしやいます。そんな状態がもうずいぶんと長く続いておいでになり、どうも快復の見込みはたちそうもなく、日に日に弱っていかれる一方なのでした。その様子をご覧になり、夫の院はたいそう心配なさっておいでです。そして、

「紫の上が先に亡くなるなんて、この上なく耐え難いことだ。自分も高齡のこととて、いずれこの人の後を追うことになるだろう、それまでの時間が、ほんのわずかなものであったとしても。この世にひとり取り残される辛さには耐えられない」と思われるのです。

一方、紫の上は、

「へもう、この世に望むものは何もありません。気にかけなければい

けない子どももないこの身の上。もう、無理に生きながらえようと思ふ命でもあるまい。ただ、私が先にあの世に行ってしまったならば、院はどんなにかお悲しみになるだろう。そのことだけがどうにもつらくてならない

と、ひとり心の中で悲しく思われているのです。

そして、あの世でのしあわせを願ってあれこれの仏事をお営みになるとともに、

〈この世に命があるうちに、仏道修行に専念したい。そのために何とか出家をしてしまいたい〉

と、思っています。

そのお気持ち、以前から院にお伝えしていましたが、これまで院は、それを決してお許しにはならなかったのです。しかし、院自身以前から出家を望む思いをお持ちだったので、

〈紫の上がこうも熱心に願っていらっしゃるなら、これを機にいつそ二人で出家してしまおうか〉

と、心が揺れ動くのです。そして、

〈修行のかけがえがあってあの世に行ったら、仏さまのお側でともに

仲良く過ごすことができるかもしれない。でも、一度出家してしまえば、この世での修行は別々のところに住んで行わなければならぬ。

そうならば、二度とこの世で顔を合わせることができなくなるだろう。それでは、いよいよ衰弱していかにも頼りなさそうになっている紫の上を見捨てるようで、そんなことはとてもできない。こんなにも迷いが多くては、無心になって、修行に打ち込むことなどできないだろう。などと考え、なかなか踏み切ることができずに過ごしていらっしやいます。

また紫の上は、

〈院のお許しなしで、勝手に出家してしまうことは世間体がよくあるまい。それよりなにより、身勝手なふるまいは、院に寄り添いながら生きてきた自分の気持ちが許さない。どうか院がひとことお許しをくださればよいものを〉

と、恨めしくも思われる一方、

〈思うように出家もできないのは、私のこの世で犯した罪が重いせいなのだろうか〉

と、気に病んでおいでなのです。

法要の準備をする紫の上

紫の上は、ご自身の出家の準備として、最も尊いとされる法華經を千部も整え、急いでお寺にお納めになろうとなさいます。そのための行事は、院とともに過ごした愛着のある二条院でとり行うこととしました。紫の上は、その法要をつとめる僧たちの法服もそれぞれその身分にふさわしいものをお与えになります。そのお色合いやお仕立てなどのたいそう素晴らしいことは、この上もございません。何もかもがおごそかで、ご立派な法要となることでしょう。

院は、この法要がそれほど大がかりなものとはお聞きになっていらっしゃらなかったのです、あれこれご指示などはなさいませんでした。それにもかかわらず、紫の上ご自身が立派にご準備されたご様子をご覧になり、

「紫の上というお方は、なんと仏道の儀式にまで精通していらっしゃる、万事に優れたお方なのだなあ」

と、つくづく感心されて、ごく一部のご準備をお手伝いなさるぐらいなものでした。

雅楽の奏者や、舞踊の舞人については、院の御子の夕霧の君が中心となつてご準備されます。

帝や第一の皇子でいらっしゃる春宮や秋好の前の中宮、そして紫の上がお育てになった明石の中宮をはじめとして、縁の深い女君の方々からも、たくさんのお供え物などが届けられます。また、法要が近づくにつれ、そのご準備に加わる人々の数も増していきます。

紫の上がもう長い間、出家を願っていらしたということが、このご準備のようすからもよくうかがえるのでした。

春景色の中の法要

三月十日が、法要の日でございます。

花散里と呼ばれるお方や、明石の中宮の実母でいらっしゃる明石の君などもおいでになります。どちらも、院の愛情を受けていらっしゃる方々です。

紫の上は、南と東の戸をあけ放たれてお座りになっていらっしゃい

ます。そこは、寢殿しんでんの西側のお部屋なのです。女君おんなきみの方々かたがたのお席は、北側の細長いお部屋をふすまで仕切ってご用意してあります。

桜の花盛りで、春のうらかな空もようも風情ふぜいがあり、きつと仏さまのいらっしやるところもこんな感じなのではないでしょうか。それほど信心深くない人であっても、罪が洗われるような気分になることでしょう。

僧の唱となえるお経きやうが、あたりにとどろいております。お集まりになつた大勢の方々のお声も、それに加わってなんとものにぎやかです。やがて、僧の声がびたりと止み、すつと静寂が訪れる瞬間があります。それは、紫の上にとっては死を予感し、いっそうの心細さを痛感する瞬間でもありました。

紫の上は、明石の中宮の御子みこの匂宮におうみやをお使いに仕立てて、明石の君に、

『もはやこの世になんの未練もない私の身ではありません。

いよいよこれで寿命が尽きると思うと、それはたいそう悲しいものです』

と、その心細いお気持ちを申しあげます。明石の君は、こちらからも

心細いお返事をしては、かえってよろしくないとお考えになり、『法華経のご法要をなさるのは今日が初めてのこと。

これからもこの世でのご法要は続くことでしょうから、末永すえながきご寿命となりましょう』

と、あたり障さわりのないお返事をなさいます。

僧の声に合わせて打ち鳴らす鼓つづみの音ねが、春の夜に絶え間なく響き渡っています。空はほんのりと明けはじめ、かすかに霞かすみのあいだから見え始めた桜の花たちが、春が一番ですよねと、言っているかのよううに咲き満ちています。笛の音に負けないように鳴いているのでしょうか、耳を傾けると、百千鳥ももぢどりのさえずる声が聞こえてきます。

お庭しつちに設えられた舞台では、陵王りやうおうの舞まいが、舞われています。舞の終わりが近づくと、急に音楽が早くなり、さらに華やかさを増すのでした。

見物の人々は、その見事な舞に感動して、ご自分たちがお召しになっているものを脱いで、舞人まいびとにお与えになります。色とりどりの着物が宙を舞う様子もまた、華やかで美しいのです。

演奏は、親王しんのうの方々や上達部かんだちめの位くらゐの人たちの中でも、音楽に秀ひいで

ている人たちが行います。その家々に代々だいた伝わっている演奏の秘技ひぎを、惜しみなく披露なさっているのです。その時ばかりは、身分の上下は関係ありません。みな、音楽を心から楽しんでいらっしゃるのです。その様子をご覧になるにつけても、紫の上は、
へなんてすばらしいのでしょうか、この世の中は

と、しみじみと思われるのです。それは、ご自分の残り少ない寿命をお悟りさとになっていらっしゃるからのことなのでしょう。

紫の上は、いつになく起きてお過ごしになられたお疲れのためか、ご気分が悪く床とこに伏していらっしゃいます。

今行事があることに、いつも集まって音楽を奏かなでてくださいる人々のお顔やお姿を見るのも、これが最後。すばらしい琴や笛の音ねを耳にするのも、これが最後

とお思いになり、日ごろは目にもとまらない人々のお顔まで、ひとりひとり丁寧に見渡しなさるのでした。

まして、日ごろから親交のある女君の方々ともなれば、季節ごとの音楽の催もよおしなどでも、これまでそれとなくお互いに張り合っていたことを思い出し、

へこの世の中に永遠に生き続ける人などいますまい。でも、この中で私ひとりだけがもうすぐあの世に旅立つことになるとは、と心の底から悲しくなられるのです。

名残を惜しむ紫の上

法要が終わって、紫の上と親交のある女君の方々もお帰りの仕度したくを始められます。紫の上にとっては、これが永遠の別れのように思われて、とても名残惜なごりおしいのです。そして、

『これが私のこの世での最後の法要となるでしょう。』

こうして結ばれたあなたとのこの世のご縁は、この先もずっと永遠のものでございますよ』

と、花散里はなちるさとにおっしゃいます。それに対して花散里は、

『このようにすばらしい法要にお招きいただけただけのことを、大変うれしく思っております。』

この仏事によって結ばれた私たちの縁が、今後絶えることなどござい

ますものですか。』

と、お答えになるのです。

紫の上は、千部の法華経をお納めする法要に引き続いて、あれこれの尊い仏事をお営みになります。

一方、病氣平癒のご祈祷については、効果も現れぬままだ月日だけが空しく過ぎてしまいました。しかし、引き続きあちらこちらのお寺で、ご祈祷を続けさせています。今ではそれが日常となってしまうのでございました。

紫の上、明石の中宮と過ごされる夏

夏がきました。

紫の上は、夏の暑さに耐えられず、気を失ってしまわれそうな時がしばしばございます。重症ではございませんが、夏の暑さと、長く患っていらっしゃることが重なって、日ごとに衰弱していわれます。お仕えしている侍女たちも、

へいったいどうなってしまうのだろうか

と、不安と悲しみでいっぱいになりながら、お世話なさっているのです。

明石の中宮が、養母である紫の上のご病状をお聞きになって、二条院にお里帰りになります。その間は、二条院の東の別棟にご滞在になります。紫の上は、自身のいらっしゃる西の別棟から、東の別棟にごあいさつのためお渡りになります。

明石の中宮が、ご到着になりました。付き添いの人々が入ってくるたびに名を名乗る儀式は、いつもとんなら変わりはありません。しかし、紫の上にとっては、もうこれが聞き納めかと思われて、その声に耳をそばだてられるのです。

へああ、あの人、ああ、この人もいらっしゃる。なんと、たくさんの方々がお供してこられたことでしょうか

と、一人ひとりのお姿を、思い浮かべられるのです。

明石の中宮とは、ずいぶんと長い間お会いになっていらっしゃいませんでした。たいそううれしく、積もる話をなさっておいでです。

そこへふと、院が入っていらっしゃって、

「楽しそうですね。今夜は私の居場所はないようだ。巢に入れない鳥のようだ。邪魔者はさっさと帰って寝ることにいたしましょう」とほえんで、お戻りになってしまいました。院は、紫の上が起きていらっしやるということだけでも、どんなにかうれしく思われるのです。

紫の上は、

「それぞれ別棟にわかれておりましては、さみしゅうございます。しかし、もうこのからだでは、こうして参上することも難しい状態となてしまいました。だからと申しまして、中宮というお立場の方に、私の西の別棟にいらしていただくなどということは、到底できません」とおっしゃって、しばらくは東の別棟に滞在なさることとなりました。

そこへ、明石の君がおいでになり、しんみりとさまざまなお話を静かになさいます。

紫の上には、ご自身の死後について、あれこれ思いめぐらすことがおありになるのですが、それらのことを口にしたならば、人々が悲しむことだろうと思つて、何もおっしゃいません。ただ、世間話をそれ

となくしみじみとお話されるだけなのです。

こうして気丈きじょうにふるまってはいらっしやいますが、やはりそのお顔は何とも心細そうなのです。

明石の中宮のお子さま方がたをご覧になるにつけても、

「お子たちのご成長を見守っていくことを楽しみにしておりましたのに、もうここまでの命なのかと、残念でなりません」

とおっしゃって涙ぐまれるのです。この時はかなげなお顔ですら、なんとも言いようのない美しさなのです。

その様子をご覧になって、明石の中宮は、

「なんとも気弱なことばかりお考えになって」と、ただただお涙されるのです。

紫の上は、遺言ゆいごんめいたことを申し上げると不吉ふきつに思われるだろうからとお気づかいになり、何かのついでにそれとなく、

「長年ながねん、私に仕えてくださった侍女たちの中にも、頼れる親族のいない者もおります。そう、この人……。ああ、それにあの人も……。これらの人たちについて、これからもずっとお気を配ってあげてくださいね」とだけ、さり気なくおっしゃるのです。

明石の中宮が主催される、季節ごとの法要があります。その定例の法要がこれからはじまるということなので、紫の上は、ご自分の西の別棟にお戻りになります。

匂宮に遺言する紫の上

大勢いらっしゃる明石の中宮のお子さま方がたの中でも、まだお小さい匂宮は、まことにかわいらしく歩きまわっていらっしゃいます。紫の上は、ご気分のよい時に匂宮をお膝ひざに座らせて、

「この私がいなくなりましたら、思い出していただけのかしら」と、ほかの人の耳に入らないところで、こっそりとおっしゃいます。「きっと、恋しくて恋しくてなりません。だって、ぼくはお父さまよりも、お母さまよりも、おばあさまが一番好きなのですから。いらっしゃらなくなったら、きっとしよんぼりしてしまうことでしょう」と、おっしゃいながら、涙が出そうな目をこすってまぎらわしていらっしゃいます。それもまた、まことにかわいらしいのです。そのお姿を

ご覧になり、またも涙がこぼれる紫の上なのです。そして、「おとなにおなりになったら、この二条院にお住まいになっていたかしら。このお部屋の前庭まえにわにある紅梅こうばいと桜を、春には気にかけて、愛めでてくださいまし。その花を手折たおって仏さまにもお供えくださいませ」

と、おっしゃると、匂宮はこっくりとうなずいて、じっと紫の上のお顔を見つめていらっしゃいます。そうしているうちにも、匂宮のほほには涙が伝いそうになるのです。お小さいながらも、その姿を見られまいとして匂宮は、そのまま立っていつてしまわれました。

紫の上は、この匂宮と女おんな一いちの宮みやとを、とりわけ目をかけてお育てになったのですから、ご成人されるまでお世話できないことが、残念でたまらなく悲しく思われるのでした。

別れがたい秋の日

ようやく、待ちかねていた秋がきました。

いくぶん涼しくなり、紫の上は気分もいくらか楽になる時もありますが、それでもやはり体調の優れない日々が続いています。冷たい秋風が吹くというほどではありませんが、ふっと感じる風は、すでに秋のものです。秋の気配を感じて、どこかさみしく、涙がちな日々を過ごしていらっしやいます。

明石の中宮が、宮中にお帰りになろうとなさるのを、

へもう少しだけ、おそばにおいでいただけませんかでしょうか。

と、紫の上はおっしゃりたいお気持ちなのです。しかし、帝からのお帰りを促す使いの者がしきりと来ているようです。それに、立場上、明石の中宮にそのようなことを申し上げることはできませんので、遠慮なさっているのです。

そのような折りに、明石の中宮が紫の上のお部屋においでになりました。なんとも恐れ多いことではございますが、せっかくこうまでして面会にいらしてくださいだったので、急いでお迎えする準備を整えられ

ます。

明石の中宮は、紫の上のおやつれになった姿をご覧になって、

〈同じ花でも、今は弱々しくも可憐に咲く花という感じ。ふっくらされていたところより、かえて上品で優美な感じが際立っていらっしやる。女ざかりのころは、あまりに色香に満ちていて、まさに、この世の花という感じでいらした。そう、咲きこぼれんばかりの美しい凜とした花のように……。ああ、このままこの世からいなくなってしまうのだろうか〉

と、ただただ無性に悲しく思われるのです。

最期のとき

秋の風が、ぞっとするほどの悲しく吹く夕暮れのことです。

紫の上は、お庭をご覧になろうとしてひじ掛けに身を預けていらっしやいます。そこへ院がおいでになり、

「今日は、珍しく起きていらっしやるのですね。明石の中宮がいらっ

しゃると、ご気分もすっかり晴ればれとされるようですね」

と、うれしそうにおっしゃいます。

紫の上は、

へこうして、からだを起こしているというだけのことでも、院はこんなにお喜びになる。その様子を拝見するにつけても、なんと悲しいことか。いよいよよとなってしまうたならば、どんなに取り乱されることか。そのお姿を想像すると悲しくて、悲しくて

と、お思になるのです。そして、お庭の風に吹かれて折れかえっている萩の枝の風情になぞらえて、こう申し上げるのです。

『こうして起きているのはつかの間のごときでございます。』

萩の葉に宿った露もひとたび秋風が吹けばさらわれていってしまますでしよう。私の命も同じです』

院は、その様子をご覧になってこらえきれず、

『先を争うように消えてゆく露などにたとえないでください。』

それならば、一緒に消えてしまいたい。置いて行かないでください

とおっしゃいながら、ぬぐいきれないほどの涙をお流しになるのです。た。

傍らでお聞きになっていた明石の中宮は、

『命というものは、しょせん秋風に吹かれて消える露のようなものです。』

私たちも、みな同じように消えてゆくばかりなのです』

と、おっしゃいます。

院は、このお二人のたとえようもないほどの美しいお姿をご覧になって、

へああ、このまま千年も過ごしたいものよ。かなわぬ夢なのだろうかとお思になり、紫の上の命をこの世にとどめるすべがないことをもどかしく思われるのでした。

その時です。紫の上が、

「もう、お引き取りくださいませ。ああ、苦しい。苦しくなってきました。このように衰えた身だからと申ししても、これではあまりに見苦しゅうございます」

と、身を隠すためについたてをお引きよせになり、床に臥されます。

そのご様子は、いつもとは全く違います。

明石の中宮は、紫の上の手をお取りになり、

「どのような気分ですらっしゃいますか」

と、涙ながらにご覧になります。

それは、まさに秋風に吹かれる露のように、息を引き取られようとしている瞬間ではありませんか。

お部屋のまわりには、祈禱きとうの僧を呼ぶ声や、それらをせかす叫びさけ声が響ひびきわたります。以前、死霊しりように取り憑つかれたときは、このようになられてからも、息を吹きかえされたことがございました。今回もまた、死霊しりようの仕業しわざかもしれないと、一晩中、祈禱きとうなど、できる限りのことをなさいました。しかし、そのかきもなく紫の上は、夜があけるころ息をお引き取りになってしまいました。

明石の中宮は、

へ急いで宮中に戻らなくてよかった。こうして最期さいごの時をご一緒できました。これはやはり、本当の親子と同じぐらいの固い絆きずながあったからだろう。生きとし生けるもの、だれもが経験する別れ。わかってはいるけれども、でも、あきらめきれない。ああ、夢であってほしい〜と、この場にいられたことをよかったと思うと同時に、割り切れない気持ちでいっぱい、たいそう取り乱しておいでです。

二条院の中には、冷静でいられる方かたはひとりもいらっしゃいません。おそばにお仕える侍女なども、ただただ取り乱すばかりなのでした。

まして院は、狂わんばかりに取り乱していらっしゃいます。そこへ、急を聞きつけて、夕霧の君が参上されました。院は、紫の上の眠る床のそばのついたての近くまでお呼び寄せになって、

「もう、これまで。ついにお亡なくなりになってしまった。長年ながねん出家をお望みでいらしたにもかかわらず、かなえてやれなかった。こうなってみると、望みをかなえてやれなかったことが悔やまれてならない。加持かじ祈禱きとうの僧侶そうりよや、読経よみぎょうを続けていた僧なども、声が聞こえぬところをみると帰ってしまったようだが、それでも少しは残っている者もあろう。その中に、出家のための剃髪ていはつのできる僧はいないものか。いまさら髪をおろしても、無意味であろうとは思いますが、せめて、せめて極楽浄土ごくらくじょうとへの道しるべになるくらいの効果はあろうものよ」

と、気持ちを強く持って正気しょうきを保とうとなさりながらお話しなさいます。しかし、そのお顔色は普段と全く違います。あふれ続ける涙をどうすることもできずにいらっしゃる院のお姿を拝見して、夕霧の君

は、

「父君が、悲しみのあまりこうなるであろうとは思っていただけども、

これほどまでとは」

と思われ、なお一層、悲しみがつのるばかりです。そして、

「死霊の仕業で、一時的に紫の上の息をお止めているというのであれば…、そういうこともあるようです…それならば、お望みをかなえて髪をおろして差し上げることに意味がございましょう。そうであれば、それがたとえ一日、いや一晩でもその効果はありましょう。

しかし、本当にもう息をお引き取りになったのならば、髪をおおろししても、あの世のための功德にはならないというものです。効果なごぞいませぬ。髪をおろされたお姿を拝見するにつけ、あとに残ったものの悲しみがまさるばかりとなりましょう」

と、進言なさいます。

夕霧の君は、葬儀にたずさわるために残っている僧たちをお呼び寄せになり、これからのことをご相談になります。葬儀の一切は、この夕霧の君が取り仕切られるのでした。

紫の上の亡骸を見る夕霧の君

夕霧の君は、少年だった秋の嵐の日に、偶然拝見した紫の上のお姿がまぶたに焼き付いているのです。それは、義理の母であり、父の最愛の人であることは承知の上のことでした。

「いつかまた、あの時のようにお姿を拝見できるのではないか、少しでもお声を耳にできるのではないか。そう思い抱いていたのだが、とうとうお声を拝聴することは、かなわぬ夢と消えてしまった。

もう、二度とお声を発することのない亡骸となられてしまったのだ。亡骸ではあるけれども、そのお姿を拝見する機会は今、もうこの時しかない」

と、夕霧の君はお思いになると、狂おしいほどの悲しみに襲われ、あふれんばかりに涙を流されるのです。そして、

「ああ、お静かに。しばらく」

と、居合わせた侍女たちが取り乱しているところを制止なさるふりをして、院と紫の上をおおっていたついでを手で押しつけて、中をご覧になるのでした。

そこには、ほのぼのと明けゆく夜明けの光がまだ少し心もとないの
で、明かりを近づけて紫の上の顔を見つめていらっしやる院のお姿
があります。

それと同時に、

へああ、なんとおかわいらしい。まるで、まだ生きておられるかのよ
うだ。気高く美しいこと、この上ないお姿でいらっしやる

と、夕霧の君は、紫の上のこの上ない美しさに目を奪われるのです。

院は、日ごろ夕霧の君に紫の上の姿を見られないよう、注意を払っ
ていらっしやいました。しかし、そのことすら気にかけることができ
ないほど、今は混乱されているのです。夕霧の君が、こうしてのぞい
てご覧になっているのに、それを無理に隠そうともなさらないので
す。

院、夕霧の君それぞれの悲しみ

「このとおり、ただ眠っておいでになるようなお顔でいらっしやる

が、もう二度とお目を開けてはくださらない。もう二度と……」
とおっしやりながら、院は袖を固くお顔に押し当てておいでです。

夕霧の君は、あふれる涙でよく見えなくなった目を無理に開いてご
覧になり、

へいつかまた、お姿を拝見したいと願ってきた。その時が、永遠の別
れの時とは。こんなに悲しいことがあるだろうか

と、心みだれるばかりです。

生前とまったく変わらない紫の上の髪が、枕元に流れるように投げ
出されています。その髪は、つやつやと黒く、少しの乱れもなくそこ
にあるのです。病に苦しまれた方の髪とは思えぬ美しさ。また、灯
されたあかりがたいそう明るいので、そのお顔の色は、白く輝いてい
るように見えるのです。

生前、たしなみ深くきれいにお化粧して取りつくろっていらした時
より、ただ無心に目を閉じていらっしやる今のお姿の方が、全く非の
うちどころがなくお美しいのです。

今さら、そんなことを思っても何がどうなるものでもございませ
ん。それにもかかわらず、夕霧の君は、

へ並みたいていの美しさならまだしも、まったくほかにたとえようもないほどの美しさだ。まだこの辺りに浮遊ふゆうしているはずであろう魂たましいよ、もう一度この亡骸に戻っていらしてはいただけませんか」と、願われるのです。

しかし、そんな奇跡がおこるはずもないのでございます。

悲しみにくれる二条院

紫の上のお側そばに常にお仕えしていた侍女で、正気しょうきでいられる者一人もおりません。

院自身も当然のことながら、冷静に物事をおし進めることのできる状態ではないのです。しかし、

へこんなことではいけない。愛する人のためにできる最後のこと。それは立派に葬儀を執とり行うこと

と、お考えになり、静めようもないお気持ちをあえて静めて、ご葬儀についてあれこれと指示をはじめられます。そして、

へあとにも先にもこんなに悲しい思いをすることはなからう」と、悲嘆ひたんにくれてもおおいです。

院は、今までに、たくさんの身近な人々と死別していらっしやいます。しかし、こうしてご自身が中心となってご葬儀の指示をなさらなくてはならないという経験は、これまでおありではありませんでした。

葬儀

やがて朝が近づいてきました。その日のうちに、ご葬儀を営まれます。

いつまでも亡骸を見ながら過ごすわけにもいきません。それが世の中の決まり事なのでした。

ご葬儀をなさる場所は、はるかかなたまで広がる野原にあります。その広い野原いっぱいにはたくさんの牛車ぎしやが立て込んでいて、たいそう盛大で、しかもおごそかなお式です。

やがて、紫の上は、まことにはかない煙けむりとなって空にのぼっていかれるのです。

一筋ひとすじの煙が、空にのぼっていく様子は、なんとも悲しいものでございました。

院は、空中を歩むようにふらふらとして、ご自身ではとてもお歩きにもなれず、人の手をお借りになっていらっしやいます。

そのお姿をご覧になった人々は、

へあれほど威厳いげんのある立派かたなお方が、あのようなお姿になられてくと、涙を流したものです。世間の常識もわからないであろう下働きしたばたらの者どもでさえ、そう思うぐらいなのです。

ご葬儀に付き添った侍女たちは、院にもまして、夢か現実なのかもわからないような気持になっています。気が動転してふらふらしている侍女たちが、牛車ぎしやからころげ落ちそうにさえなるのです。それは、牛車をひいている者が、こまり果てるほどでした。

院は、かつての妻である葵あおいの上うへがお亡くなりになった昔のことを思い出されます。

へああ、あの時も夜が明けようとしていたころであった。しかし、あ

の時は、ものの分別ぶんべつはつけられた。月をはっきりと見た覚えがある。今はただただ悲しくて月の姿もわからない。

と、悲嘆にくれるばかりです。

十四日にお亡くなりになって、これは十五日の夜が明けようとしている時のことでした。

朝日がきらきらとさしてきて、広い野原一面の草木くさきの上の朝露あさつゆを余すことなく照らしだしています。

院は、この露のようににはかない命となられた紫の上のことを思うと、いよいよこの世でこうしていることがいやになり、

へひとりぼっちで生きていてもしかたがない。ただ、悲しいだけだ。

出家してしまおうか。ずっとそう考えていたのだからと、お考えになるのです。

しかし、世間せけんから、紫の上を亡くして悲しみに耐えられず出家したと噂されるのがいやで、

へ少しばかり時間をおこうと、お考えを改められるのです。

耐えがたい悲しみに胸がいっぱいなのですが、それをいやすものは

もうどこにもございませんでした。

夕霧の君の秘めた想い…そして悲しみ

夕霧の君も、静かに死者を悼む期間として、外出を控えておいで
す。自邸にもお帰りにならず、一日中院のお側にお付き添いになり
ます。痛々しいばかりに打ちひしがれた院の様子をご覧になり、
〈ごもっともなことだ〉

と、お察しし、いろいろとお慰め申し上げるのです。

昔、少しばかり紫の上のお姿をご覧になったあの日と同じ、台風の
ように風が強く吹く夕暮れのことです。

夕霧の君は、

〈ああ、あの時もこのような風が吹き渡っていて、ほのかにあの方の
お姿を拝見したものを〉

と、恋しく思わずにはいらっしやれません。

そして、

〈ご臨終の折りの美しいお姿を拝見したときは、夢をみているような
気がしたことだ〉

などと思いつけていらっしやると、こらえきれないほどの悲しみがお
そってくるのです。そのお気持ちを、決してほかの人に気づかれませ
んように包み隠しながら、

「阿弥陀仏、阿弥陀仏」

と、唱えられるのでした。しかし、涙なしでは唱えられません。そこ
で、いくぶんでも、気をそらすことができ、涙をごまかせるであろう
と、「阿弥陀仏」を唱えられるごとに、お数珠の玉を一つずつ指先で
繰っていかれるのでした。

そして常に、あの美しいお姿が頭からはなれず、
『あの秋の夕暮れ時にほのかにお見受けしてから、いつかもう一度あ
の美しいお姿を拝見したいと、ずっと恋しく思っておりました。

それなのに再び拝見することができたのは、すでに息を引き取られた
後のあの明け方だったとは』

と、ひとりごとをつぶやかれるのでした。

また、位の高い僧をそばに控えさせて、お定まりの念仏を唱えさ

せておいでですが、あの法華経ほけきょうも唱えさせていらっしやるのでした。

人生を振り返る院

院は、寝ても覚めても涙が乾くときがなく、あふれ出る涙のせいで、目の前が霧でふさがるような毎日を過ごしておいでです。

悲嘆にくれる日々の中、院は、幼いころからの自身の人生を振り返られるのでした。

へ鏡に映るこの顔かたちをはじめとして、さまざまなことにつけ、普通の人よりは優れていたわが身ではあった。しかし、人生というものは悲しいことも多く、はかなく無常でもある。そのことを、幼いころから仏さまが教えお導き下さっていた。それなのに、仏さまの教えを気にもとめず、強がって生きてきてしまった。そのあげくの果てに、あとにも先にもこの上ないほどの、ひどく悲しい目にあってしまったのだった。今はもう、この世になんの未練も残ってはいない。仏さまの弟子でしとなり、ひたすら仏道修行をしよう。なんの障害となるものも

ないのだから。

ただ、このように心が乱れてしまって、正気しょうきを取り戻すことができない今の心持ちでは、仏道修行に入ることも難しいのではないだろうか。どうしたらよいものだろうか

と、思案され、

「ああ、どうかこの悲しみを少しでも忘れさせてください」と、「阿弥陀仏」を念じ申し上げていらっしやるのでした。

出家を決心する院

帝をはじめとして、あちらこちらかたがたの方々から、たいそうお心のこもったお見舞いのお言葉やお品物が、次々に届けられます。

しかし、出家を決心した院にとっては、もう何も、目にも耳にもお入りになるご様子ではございません。そして、今となっては何ひとつ出家のさまたげになるようなことはないはずなのです。それなのに、へ紫の上を亡くして、すっかりぼうっとした人になってしまわれた。

今さらいい歳としをして、この世を捨てて出家されるとは。みっともないほど気弱きじやくになられたことだ

などと、世間の人に思われ、はずかしいわさが流れるのを恐れていらっしやいます。

そうした心のままに行動できないご自分について、もどかしくも嘆いていらっしやるのです。

頭の中將からのお見舞い

少年の頃から親しく付き合ひのある頭かぶの中將ちゆうじやうという人は、もともと形式や礼儀を重んじられる方なのですが、それに加えて、

へこの世の中に、ふたりとしていらっしやらないような方かたであった紫の上むらさきの上が、あっけなくお亡くなりになってしまわれて残念でならないと、同情なさって、まめに何度もお見舞いをお寄せになっていらっしやいます。

そして、

へその昔、夕霧の母上ははの上が亡くなったのもこの季節であったなと、思いだされ、本当ほんとうにも悲しいお気持ちになり、

へあの時、妹が亡くなったことを悲しんでくださった方々も、今ではたくさんお亡くなりになってしまった。我々は同じ時を生きているのだから、亡くなる時もそんなに時間の差があるものではない。みな同じようなものなのだ。この世はなんと、はかないものなのかと、しみりした夕暮れ時を過ごしていらっしやるのです。

ふと、外をご覧になると悲しみを誘うような空もようです。そこで、院へのお見舞いのお手紙をしたため、息子である藏人くみんの少將しょうじやうにお届けさせになります。

そこには、しみじみとしたお見舞いのお言葉が心こまやかにつづられ、その端には、

『妹が亡くなった昔のことが、今のような気がします。紫の上がお亡くなりになったことで流した涙で濡らした袖そでに、また露つゆを置くかのように涙で袖を濡らしています。悲しみの上に悲しみがかさなります』
としたためられています。

その手紙をお受け取りになった院は、

へただただ悲しくてならない素直な気持ちをそのまましたためたならば、そのお手紙をお読みになって、私の心の弱いことを見抜きにられることだろう。頭の中將はそういう方だ

と、お考えになり、

「たびたびのお心のこもったお見舞いをちょうだいいたしまして、か

さねがさね感謝いたします」

と、体裁を整えられたお礼の言葉を添えられた上で、

『露を置くように涙で袖を濡らすのは今も昔も変わりはしません。

ただ、秋の夜というのが、そういう気持ちにさせるのです』

と、したためられました。

院は、葵の上がお亡くなりになった時、薄墨色の喪服をお召しでし

た。今は、その時より濃い色の喪服をお召しです。

紫の上の死をいたむ世の人々

人というものは、幸運に恵まれ申し分なくすばらしい人であっても、そのことがかえって世間でねたまれたりもするものです。また、身分が高ければ高いで、いばったりするので、周囲の人が迷惑に思うことでしょう。

紫の上は、不思議なほど、関わりのない人にも評判がよく、ちょっとしたことをなさっても、何事においても、世間からほめたたえられる方だったのです。そして、奥ゆかしくて、何かにつけて行き届いた心づかいがおできになるといふ、だれもまねできないたいそう優れたお人柄なのでした。

このようなお人柄だったため、それほどお付き合いがなかった方でも、秋風の音や、虫の音を聞くにつけても、紫の上がお亡くなりになったこの秋には、涙を流されるのです。ましてや、少しでもお付き合いがあった人は、悲しみの慰めようもないほどの日々を送っていらっしゃるようです。

さらに、長年おそばでお仕えて慣れ親しんでこられた人々にい

たっては、しばらくの間でも、紫の上より長く生き残ってしまったことをなげいています。そして、中には今までの生活を捨てて尼あまになって、山寺などに住まうことを思い立つ人もいたほどなりました。

秋好の中宮からのお見舞い

院と紫の上が親代わりをつとめられている秋好あきこのむすめの前の中宮ちゅうぐうからも、お心のこもったお手紙が絶え間なく届けられます。

『悲しみが尽きることはありません。』

亡き方は、草木が枯れ果てた景色がお好きではございませんでした』
というお歌に続けて、

「今、こうして悲しみがつのる秋となってみて、はじめて気づきました。紫の上が、秋より春を好まれたことを」

と、したためられていました。それを拝見した院は、

へごもつともだく

とお思いいなくなって、そのお手紙をお手元から離すことなく、くり返し、

くり返しご覧になるのです。

へお文ふみを交かわして心がなごむのは、この方かただけなのだ。こうしていると、少しは悲しみがまぎれることよく

そうお思いいなるにつけても、涙がこぼれ、袖の乾く間もございません。

やっこのことで、

『煙となって空高くのぼってしまわれた方よ、どうか私を雲の上からご覧になって下さい。』

この秋の果てに、私はもう生きる力を失ってしまいました』

と、お書きになり、そのお手紙を手にしたまま、またぼんやりと秋の空を見つめていらっしゃるのです。

仏さまに手を合わせる院

院は、すっかり元気をなくされてしまいました。

ご自身でも放心状態であると、思い知らされることが多くおありな

のです。そうした気持ちを少しでもまぎらわそうと、気楽にふるまえることのできる侍女たちのお部屋にいらっしやっては、時を過ごさせます。

仏さまがいらっしやるお部屋にはあまり人をお近づけにならず、ひとり心静かに手を合わせて、ただひたすら、

千年も共に過ごそうと誓ったのに、別れはやってきてしまった。なんと悲しいことか。今はただ、極楽では同じ蓮の葉の上で過ごしたいと、願っていらっしやいます。

へあの世では、今のようない悲しい思いはしたくない。そのためにも早く出家して、そのことを一心に願わなくてはならないとお願いになるのです。

そうは言うものの、やはり世間体ばかり気にされるのです。これは、なんとも愚かしいことなりました。

残されたものの悲しみの日々

ご法事のことなどは、院がお取り決めになれない状態なので、代わって夕霧の君がお取り決めになり、ご準備されました。

院のお気持ちはというと、

へ今日こそは、出家しよう

と、決心なさることも多いのです。しかし月日はただ流れ、夢を見ているようなぼうっとした心地のままお過ごしになっておいでです。

明石の中宮も、亡き紫の上をかたときもお忘れになることはございません。在りし日を思い出されて、懐かしんでいらっしやいます。

【参考文献】

- ・三浦理編『源氏物語』〈三〉（大正三年七月十日 有朋堂文庫）
- ・有川武彦校訂『増註 源氏物語湖月抄』〈下巻〉（昭和三年十月十五日 弘文社）
- ・窪田空穂『源氏物語』（昭和三十七年三月二十日 春秋社）
- ・谷崎潤一郎『新々訳源氏物語』〈巻七〉（昭和四十年六月二十日 中央公論社）
- ・塩田良平『古典文学全集・4』『源氏物語』（昭和四十年六月三十日

ポプラ社)

・玉上琢弥『源氏物語評釈』〈第九巻〉(昭和四十二年七月三十日 角川書店)

・円地文子『源氏物語』〈巻七〉(昭和四十八年三月二十日 新潮社)

・石田譲二・清水好子校注〈新潮日本古典集成〉『源氏物語 六』(昭和五十七年五月十日 新潮社)

・田辺聖子『新源氏物語(下)』(昭和五十九年五月二十五日 新潮社)

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳〈完訳 日本
の古典 第二十巻〉『源氏物語』(平成元年四月一日 小学館)

・大和和紀〈講談社コミックスミミ 二二六九巻〉『あさきゆめみし』
〈十〉(平成二年一月十三日 講談社)

・瀬戸内寂聴〈少年少女古典文学館 第五巻〉『源氏物語』〈上〉(平
成四年十二月十九日 講談社)

・瀬戸内寂聴〈少年少女古典文学館 第六巻〉『源氏物語』〈下〉(平
成五年一月二十八日 講談社)

・柳井滋ほか校注〈新日本古典文学大系 二十二〉『源氏物語』〈四〉
(平成八年三月二十八日)

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳〈新編日本古
典文学全集〉『源氏物語』〈四〉(平成八年十一月十日 小学館)

・瀬戸内寂聴『源氏物語』〈巻七〉(平成九年十月三十日 講談社)

・畠中光亨・石井睦〈京の絵本〉『桐壺「源氏物語」より』(平成十
一年十月一日 「今日の絵本」刊行委員会)

・与謝野晶子『与謝野晶子の源氏物語』〈中〉 六条院の四季』(平成
二十年四月二十五日 角川学芸出版)

・大塚ひかり『源氏物語』〈第五巻 御法と早蕨〉(平成二十一年九月
十日 筑摩書房)

・林望『謹訳 源氏物語』〈七〉(平成二十三年十二月十日 祥伝社)

・中野幸一『正訳 源氏物語 本文対照』〈第七冊〉(平成二十八年十
二月二十日 勉誠出版)